

座談会

北海道の協同集会から見えてきたもの

【出席者】

- 小野 正昭（北海道建設企業共同組合連合会副理事長、道北勤労者企業組合理事長）
大友 勝紘（北海道建設企業共同組合連合会理事長、釧路建設厚生企業組合理事長）
菅野 正純（協同総合研究所専務理事）
中田宗一郎（日本労働者協同組合連合会専務理事）
宮崎 隆志（北海道大学教育学部助手）
山田 定市（北海道大学教育学部学部長）
司会：竹下 満高（北海道建設企業共同組合連合会専務理事）

【中田】 日本労働者協同組合連合会は、3年来、北海道での企業組合の運動をどう労働者協同組合として本格的に発展させるかということで、大友さん、小野さんと議論してきました。その過程で、黒川先生、富沢先生、そして山田先生をはじめとする地元の先生方にも加わっていただきながら、北海道の雇用・失業問題の調査も行ないました。そうした中で、どうしても全国水準の労働者協同組合を北海道に打ち立てなければならないということをお互いに確認して、4事業団の統合の方向と協同集会の提起を行なったわけです。全国連合会は、全国規模の集会を4回経験してきましたが、連合会が関わった県・ブロックの集会は、この北海道集会が初めてで、全国的な典型にしたいということで連合会、研究所も力を入れて取り組んできました。今日の座談会では、北海道集会の経験から全国的な教訓を引き出していただけたらと思います。

【注】 北海道の「企業組合」と4(3)事業団統合について

1974年の季節労働者への失業給付引下げ後の暫定措置で発足した積雪寒冷地冬期雇用促進給付金制度の受皿として15年に亘り機能してきた企業組合は、同時に通年就労部門としての事業団運動をも平行的に進めてきたが、全国的に事業団の労働者協同組合への転化が本格化する中で、同じ方向を目指す事業団が統合し、北海道における労働者協同組合の中軸となるべく、目下、取組みが強められている。（詳細はP.43の「北海道の企業組合、4事業団統合」に関するコメントを参照）

さまざまな協同活動が一堂に

【司会】 それではまず、集会の率直な感想というようなところからお願いします。

【山田】 北海道では生協、農協、漁協をはじめとして、太田原先生の言葉を借りれば「コープアイランド」と言われるほど、協同活動が非常に活発に進められていますが、それらの協同活動を担

っている個人や団体が一堂に会して、共通の問題意識で話し合ったということは、これまでになかったことです。それも単に種類の異なる協同組合が集まったというだけでなく、協同組合の運営を担う理事と、組合員、協同組合の労働組合という立場の異なる人々が集まったこと、また、新しい息吹としての労働者協同組合を含めて、これまでの協同組合には包み込まれない、さまざまな自由な協同活動が、一堂に会して議論できたことは、

画期的なことだと思っています。

[中田] 太田原先生も記念講演の切出しで「協同組合分野の研究に長いこと携わってきたけれども、今日の集會を感動の思いで受けとめている」とおっしゃっていますね。

[大友] 北海道の協同組合運動の歴史の中で言うと、1980年に生協労連が呼びかけた集會がやられて、記録としては残っていますが、それ以来の集會です。僕が住んでいる釧路・根室管内では、60年代から70年代半ばくらいにかけて、大学の先生や教職員組合の先生方が中心になって「労農大学」を組織した伝統があるわけですが、これも70年代半ばくらいで途絶えています。今度報告のあった別海の場合は、山田先生などのご指導で、「労働学習会」として再開されているわけですけれども。その意味で、今回の「協同」をテーマにした、「地域づくり・仕事おこし」の集會は、一つの活気をつくったんだろうと受け止めています。その背景には、北海道の地域崩壊、産業崩壊の厳しい現実があると考えております。

[山田] 象徴的なのは、旧国鉄の分割民営化に伴って、北海道の雇用・失業問題が国鉄労働者にも大きく降りかかってきたことですね。その中で、自活の道を自ら切り開いていくということで、音威子府をはじめ非常に貴重な経験が、厳しい条件の中で培われていて、企業組合とはまた違った意味で、労働者協同組合運動を進めていく条件が生まれていることを感じます。

企業組合が集會にかけた思い

[山田] このような集會がなぜできたかと言いますと、何と言っても、昨年京都で開かれた「いま『協同』を問う'92全国集會」の成果が非常に大きいですね。集會に参加した人たちを中心に、何とか北海道でも同じような試みを成功させたいということで、準備が進められたわけです。と同時に、それをさらに組織的に支えたのは、北海道における企業組合の活動の蓄積とその組織的な力でした。これを抜きにして、今回の集會の成功は



山田定希

考えられません。企業組合に結集している人々の立場から言えば、新しい飛躍を必要としている時期に、協同活動を中心とする幅広いネットワークをつくって、そういう連帯の中で企業組合自体が労働者協同組合に一步でも二歩でも接近していくきっかけにしたい—その熱意が込められていたことも、成功の契機になったのではないかと思います。

[小野] 集會参加者の名簿を見ると、170何名の中で、道連合会は14企業組合から75名くらいになっているんですね。「『協同』は特定のイデオロギーだ」とか何とかいう、いろいろな評価があったり、試行錯誤があったりしたにもかかわらず、そういう参加で集會を包んだ。

[大友] 「協同」という言葉や表現が、「特定の理念」だとか「特定のイデオロギー」と結び付いているんだというような偏見や歪んだ見方があったし、今もあることは、非常に残念なことです。われわれは、そんなにむずかしいことを考えているわけではなくて、お互いに協力して自分たちの生活をよくしたい、職場を安定したものになりたい、住んでいてよかったという地域をつくりたい、それらを通じて人間らしく生きていきたいと願っている人々が、これを機会に交流しませんか、ということと呼びかけたわけです。

企業組合を労働者協同組合として本格的に発展させる、ということについても、全国方針を画一的に押し付けるものであるとか、移植しようとするものであるとかいう意見がありました。見当違いですね。

[小野] 降り掛かった火の粉を払い除けるようにして、株式会社形態や共同作業所という形で、

北海道でもさまざまな運動が行なわれてきたわけで、そういう報告の一部として、労働者協同組合もあったというのが、実際の姿だった。それを「特定のイデオロギーにもとづいて」と言ってる人たちは、見てきて言っているのか。企業組合も、われわれ自身の十数年間の実践の到達点として、この道以外にない、ということで問題意識をもって、それで、「特定のイデオロギーにもとづく（北海道）上陸作戦」なんていうものじゃないですよ。



大友勝敏

【大友】 企業組合は、もともと北海道の季節労働者の生活防衛の中から生まれたわけです。つまり季節労働者に対する失業給付が90日分から50日に削られた。40日分をどうするんだという運動と闘いの中で、冬場の生活資金を国の制度を活用して埋め合せていくことが第一の仕事でした。そこには、自分たちの住んでいる地域で働きたいという要求や、労働者としての権利や必要な知識を学びたいという要求をどう実現していくかという課題が当初から含まれていました。

あわせてわれわれは、当時は30万人いた未組織の季節労働者を労働組合に組織していくことを、自分たちのもう一つの任務として進めていきました。これは国鉄の闘いとか、倒産した会社を労働組合が中核になって再建した運動と似たものではないかと思っています。それは、地域の人たちとの連帯や支持・協力関係の中で、はじめて仕事が確保できるからです。失業多発地帯であり、「雇用の調整弁」とされる北海道において、企業組合・労働者協同組合による労働者の組織化という面が改めて評価されなければならないのではないのでしょうか。

そうやって企業組合の活動を進めていくと、季

節労働からもはじき出された比較的年齢の高い労働者の仕事をどうするんだということが、出てきます。これは地域に役立つ仕事をわれわれ自身がつくっていかなければ、だめではないかということから事業活動が始まっていくわけです。そうした事業活動を試行錯誤しながら進めてきて、事業体として新たな高みに立つためには、労働者協同組合として本格的に発展する、発展せざるをえないということに、十数年間の取り組みが到達するわけです。北海道に根ざした労働者協同組合——北海道という地域の人たちに受け入れられ、支持される、北海道役割を果たし得る労働者協同組合を追求していこうということです。

「これが『協同』だ」と言える内容が



菅野正純

【菅野】 まさに北海道の大地の中から内在的に「協同」への志向が力強く育っているということですね。集会準備の過程で、「協同」全般を問題にするというテーマの提起に対して、「イメージがわからない」「何をやるんだ」という反応があったし、これは全国集会の準備過程でもあるわけです。しかし、今度の北海道集会で「これが『協同』なんだ」ということが、かなりよく見えてきたのではないかと。北海道の厳しい現実と正面から取り組んできた人々の中に起こりつつある、発想の大きな転換、それが「協同」ではないのか。そのことを、次のような別海の報告にとくに感じるわけです。

——「いい町をつくりたいと思っている人たちが集まって、それぞれが自分の能力や条件を活かせる場所について一生懸命やっているうちに、こ

ういうところに至り着いた」（その発想の転換には30年間を要した、という言葉もあります）

——「農産物輸入反対とか、添加物の入った物はダメとかいうけれども、じゃあ実際にそれに代るものがあるのかと自問してみたらなかった、ということで自分たちでつくり始める」

それから企業組合のことにも触れて、「13年間やってきて、毎年毎年同じように『権利意識』だとか『制度の改善』とか、『企業への申入れ』とかやってきたけれども、労働者の団結の場がいつこうに形成されない」中で、「仕事おこし」というところに発想を飛躍させる。

そして以上の基本的観点が、「地域の産業・生活・文化を総体的にとらえる」というまことに心憎い表現でまとめられているわけですね。

【山田】 実行委員会に携わってきた者として、別海の吉野さんの報告を聞いていて非常にうれしく感じたのは、ただ地域でやっていることをまとめて持ってきたということじゃなくて、実践報告をしようと思い立ってから、地域のいろいろな人々と話し合っ、例えば図を書いてみる。そうすると、別海の中でそれぞれ別個に行なわれてきたと思われていた運動が、思いがけず、いろいろなところで関わりあっていることが分かり、結び付きが見えてきた。文字通り、地域ぐるみのいろいろなつながりの中で、一つ一つがお互いに支え合いながら進んできた地域活動だったなあということが、改めて感じられたということ、報告の中で触れておられましたことです。そういう意味では、単に報告を持ち寄ったというだけではなしに、それぞれの実践の意味づけとか、課題がはっきりして、レベルアップしていく契機に集会がなっていますね。

研究者の側からの関心の高まり

【司会】 多くの研究者の先生方の参加をいただいたことも、北海道集会の特徴ですね。

【小野】 参加者名簿を見ると、稚内から北見から、全道の主だった所に点在している大学の先生



小野正昭

方が、一人ないし二人、必ず見えているんですね。北海道の第一次産業の崩壊のもとで、さまざまな生活と運動を見ながら、研究したり、問題意識を持ったりした先生方が、一堂に結集してきたということがあるんじゃないかと思っているんです。

【山田】 実行委員会の中にも、各方面の研究領域から、かなり一つの層をなして結集していただきました。このこともある意味では他の地域にない特徴になりうるかなと思うんです。これも北海道の地域社会の持っている厳しさから来ていることとして、北海道では、どんな領域でも、何らかの形で現実の分析を進めていこうとすると、必ず地域の問題にぶつかるわけなんです。地域社会の直面している問題は何か、新たに地域を再生していく課題は何か、その担い手をどうしていくのか、というような課題として、そういう課題の共通性があるんだろうと思うんです。

それから、これは北海道だけではないんですけれども、全国集会でもそうですし、協同総合研究所でもそうですが、全体として協同活動に対する研究者の関心が、ますます高まってきているということが、一つの特徴かと思います。これは、激動する国内外の情勢の中で、新たな変革の道を切り開いていく、一つの可能性がそこあって、研究者の立場からすれば、そういう可能性と展望を含んだ、非常に魅力的な研究対象、研究課題であるということから、これだけ関心を呼び起こしているのだらうかと思っています。

そういう意味で、今回の集会で、地域で実際に活動している立場の人々と、研究している人々が一堂に会して、いろいろな意見交換ができたということは、非常に良かったと思っています。

深められた地域・自治体と協同の関連

〔司会〕 その点で、実行委員会の総括会議で議論された今回の集会の理論的な成果について、宮崎先生の方からご報告をお願いします。

〔宮崎〕 集会では、大きく二つのことが確認できたのではないかと思います。一つは、協同の現代的な意義がどのあたりにあるのかという点。二つには、協同の発展条件がどのへんにあるのかという点です。

まず前者の「協同の現代的意識」についてですが、第1に、協同性と公共性の関係で——実践的には、自治体を取り込みながら、地域を変えていくという課題があるということです。稚内や別海、共同作業所のいずれも、地域での合意づくりを優先しながら運動をつくり、実績を積み重ねて行政にアプローチしています。

第2には、「協同による地域づくり」の可能性が見えてきたことです。地域づくりは、自治体主導のものや企業主導のものなど、さまざまですが、協同による地域づくりの一番大きな特徴は、福祉でも教育でもそうですが、自分たちの一見個別的な課題を地域的な課題と統一して把握し、それぞれの運動団体が協同して地域づくりに乗り出していることです。剣淵の障害者のグループホームづくりでも、地域の農家の生活水準よりも高いレベルの共同住宅をつくらうとして、農家の反発を経験し、そこから地域の農業の活性化なしに、自分たちの福祉の問題も解決できない、という視点を明確にしていくわけです。

第3に、協同の取り組みの中で、自分たちの要求の正当性を改めて確認している点です。共作連では、自分たちの運動を「人間発達を保障する運動」としてとらえ、保育運動では子育てが「共育て」であるという位置づけをして、運動を進めています。

第4に、地域政策づくりの可能性が大きく切り開かれてきているという点です。オホーツクの健康と農業を考えるネットワークでも、農家や消費

者をはじめ、さまざまな人々の実情をつかんで、机上のプランではない、非常に具体的な政策提言がされています。

〔菅野〕 別海で企業組合が町長交渉をやって、学童保育に補助金を出してもらうが自主運営は保障するという確認をとったり、生活資金で障害を持っている人の仕事おこしをやっていくという実績がありますね。自立して協同しながら、公共的な問題を提起し、自治体を変えていくという課題は、今後、ますます深めるべき課題でしょうね。



宮崎隆志

〔宮崎〕 大きな2番目の協同の発展条件についてですが、第1に、「協同組合批判」の可能性ということです。どういうことかと言いますと、経営と組織が未分化な、ある意味で原点に立ち返って運動をしているさまざまな協同活動が、すでに大規模に展開している協同組合が持つ限界を明確にして、乗り越える方向性を示していることです。

第2に、協同組合の発展にとっての、労働組合の役割ということです。この点では、①情報公開や経営公開を迫る中で、経営をチェックし、②地域政策をつくり、それを通じて協同組合自体の活性化の方向を示し、③協同組合らしい経営を担う担い手を育てる、という3つの役割が出されました。

第3に、協同組合らしい経営や技術のあり方の確立という点です。小樽のくみあい食品の報告からは、「雇われ者根性」を克服する経営のあり方についての問題意識がうかがえますし、技術の面では、障害者が安心して働ける職場環境に役立った北見のミヤデン化学の冷凍技術、音威子府国労働争団の自前の技術の獲得、別海の「マイペース酪農」という独自の経営技術基盤などが注目され

ます。

第4に、組合員、地域住民の学習、あるいは主体形成の重要性です。いずれの実践でも、制度や政策についての学習、地域要求を把握するための学習、経営や技術を確立するための学習が基盤にあることがわかります。

協同組合の横の連携と労協

〔菅野〕 山田先生は、まとめて「各分科会で新しい芽が提示された」「既存の協同組合陣営、協同組合運動がこれと結び付いていくのかという課題が提示されたのではないかとおっしゃっていますが……。

〔山田〕 ささまざまな協同活動が一堂に会して議論してみて、あらためてお互いの置かれている条件とか、目的、活動内容に大きな隔たりがあることが、認識されたと思います。そのことを認識した上で、どうお互いに横の連帯をつくっていくのかという課題が出されているわけですね。例えば、生協の活動は、とかく事業拡大中心になりがちのところがあって、それが当たり前という感じががあると思いますが、そういうところから見ると、地域ではいつくばるように地道に行なっている非常に小さな協同活動は、いかにも効率が悪く、伸びる条件もあまりない、というふうに映る面がある。逆に産直活動をはじめ、そういう地道な活動をしている側から見ますと、生協はいったい、一般のスーパーや大手商社とどこが違うんだということ、かなり隔たりを感じるところがあると思うんです。けれども、いったんそういう隔たりをはっきりさせた上で、それぞれの協同活動が何らかの条件で結び合うことができるとすれば、今までにない大きな力が発揮できる可能性もあるのではないかと、という点も、参加した人たちの胸に落ちたのではないかと気がします。

〔菅野〕 具体的な連携の課題を考えますと、労働者協同組合的なものが必要になってくるような気がしますね。別海の報告でも「福祉サービス事業協同組合」とか、「物産加工センター」が示さ

れています。

〔大友〕 別海では、この集會を契機に、地域の先生や障害者作業所の先生、獣医さん、町会議員さんなどが、労働者協同組合の学習会を一晚泊りでやっているんですね。その中で、もう一段、別海の地域づくりと、地域の変革を行なっていくためには、やはり一つは労働者協同組合を基盤に据えなければだめかな、という合意ができてつあります。そして、獣医さんが家畜診療所をつくるにあたって、労働者協同組合的にやる可能性がないのかという模索を実際に始められた。町立病院の付添の仕事、ぜひそういうところでやれないか、という議論も始まっている。それらは、別海の地域運動なり、地域を変えていく運動に厚みをもらしていただろうなと思っています。

大きく広がった労協の視野



竹下満高

〔司会〕 企業組合が本格的に労働者協同組合に発展する上でも、集會は大きなきっかけを与えてくれたような気がしますが。

〔中田〕 太田原先生の話がとてもよかったと思うんですね。こうおっしゃってます。——「企業組合その他も様々協力する中でいろいろと新しい仕事を創り出して住民ニーズに応じていくという経験も一定蓄積されております。……『それは行政の責任だ』『行政の責任で仕事をつくれ』と言ってもこれは限界がある……。そういう資本もやらない、行政にも限界がある、しかし住民の要求としてはますます強まってきている。そういう分野に協同組合という方式で仕事をつくりだし、雇用を生み出す。こういうことができなければ、

コープアイランドとしての北海道はますます協同組合陣営を強めていくことになるのではないかと。それだけ協同の原理が地域に広く根を張っていく」。

こういう視点で、企業組合の季節の講習も洗い直して、運動の中から引き出せる教訓は何なのかを、明らかにすることが必要なのではないのでしょうか。必要があれば、いま流行りのシュンペーターじゃありませんが、「創造的破壊」もしなければならぬと思うんですよ。そうでないと、今度の到達点、高みがまたどこかに行ってしまう。単に学者に任せるんじゃないかと、自らそのことをやる必要があるんじゃないかと、思うんですけど、言い過ぎでしょうか。

[小野] 言い過ぎじゃない(笑い)、全く当を得ている。

[大友] 北海道で開かれている「合同教育研究集会」で、このところ6年間毎年、山田先生の助言をいただきながら、企業組合のレポートを分科会でやってきたんですけど、「企業組合というのはそういう仕事をやっているんですか、初めて分かった」と言われたんですね。これはショックでした。自分は何をしゃべってきたんだろうと。

われわれが企業組合で1日3時間の講習をやっているのに対して、「何かあの人たち、何百人か集まっているけど、政府から金もらって、あの人たちだけいい思いしてる」という善意の見方があったし、今でもあるんですね。われわれは、そういう見方をされるのを不当だとは思いますが、正直な見方なんです。それをおかしいよと言ったって始まらないわけです。では、どこでそのような見方が変わっていくかということ、われわれは地域に役立つ、地域に喜ばれる仕事をしていますよ、こうやって手をつないでいきたいと考えていますよ、という話をいろいろな人たちとすることで、制度の活用の意味も分かっていた。生協運動を中核になってやっている人たちですら、そうなんです。

こういう変り方をもっと総合的にしたいなあということで、協同集会も誠心誠意取り組んだわけ

です。十分だったとは思いませんが、こういう高みを目指そうという人たちが集まって感動し、学び合ったことは紛れもない事実でして、そういう人たちから新たなエネルギーを植え付けていただいたものと感謝していますし、この経験は、事業活動、事業体として、本当に労働者協同組合の実態と高みをつくっていくのに、必ずや大きな飛躍をもたらしてくれるものだろうと考えています。

[小野] 僕が参加した第2分科会で、コメンテーターの鈴木先生が「火の粉をかぶるような状態の中で一生懸命もがくような活動をやりながら、協同で作業をしている」という表現をしましたが、こうした様々の運動を、労働者協同組合というテーマでくくったらどうなるか——これがこれからの大きな課題としてある。いずれにしても、次の高みをもっていく整理がされた。整理の機会として、われわれは集会でもがんばれた。しかも、実行委員会の総括で出されたように、もっと目を向けて掘り起こさなければならない動きが無尽蔵に北海道にはある。この課題が残されているわけですね。

「社会的経済」の掘り下げを

[司会] 最後に今後の北海道での協同集会の発展方向について。

[中田] 北海道を含めて、今後全体で掘り下げてみる必要があると思うのは、富沢先生などが強調されている「社会的経済」ではないかと思うんですね。先生は、これが今の時代のグローバルな協同のキーワードではないかと提起されているんですが、今度、太田原先生や境先生のお話をきいて、ますます大事だなと思いました。

北海道の「コープアイランド」を構成する既存の大きな協同組合と、今度出会ったさまざまな運動をひっくるめて、北海道の「社会的経済」は、どのくらいあるのかを探る作業ですね。これは先生方に負うところが多いと思います。そうすると次に、これと国や道の予算との関係がどうなっているのか、という問題が出てきます。

今日ここへ来るにあたって、実に象徴的な出来事だと思ったのは、苫東開発（苫小牧東部大規模工業基地開発）の負債過多 [が発表されたこと?] です。1500億の債務ですよ。要するに国と道の事業の倒産でしょ。北海道には、これに類したことは、ざらにありますよね。その他にも、金丸のことだとか、ゼネコン汚職・金権腐敗ということを考えて、第一次産業や公共交通が抱えている借金を棒引きにしたっていいわけじゃないですか。昔の「徳政令」じゃないけれども、それが政治だと思うんですよ。そこに「社会的経済」という枠組みを立てると、第一次産業や地場産業への若手の新規参入の促進や、担い手の教育に公的な資金を活用することが、当然考えられるし、ヨーロッパでは実際にそれがやられているわけですよ。



中田
宗
一郎

「社会的経済」という、今の時代が求める大きな方向の中で、既存の協同組合も、労働者協同組合や新しい協同組合も、また協同組合と名乗っていない、さまざまな協同運動も、その位置づけがされる——そんなことがやられたらいいという気がします。

〔山田〕 今度の集会は、一日の日程でやったということもあって、課題はかなり明確になったように思うんですが、もう少しそれをお互いに深めることができれば、という思いが参加者それぞれに残ったという気がします。

そういう意味で、もし2年後を目標に次の集会を準備するとしますと、その中間の段階で、例えばそれぞれの地域で、規模を問わず、できるところから実践を持ち寄って深め合う、そこにまた研究者がそれぞれの立場で参加してお互いに深め合う——そういう場があってもいいのではないかと

思います。

それから、理論的な関心が非常に高い課題だということからすれば、片方で理論問題として、適当な時期にシンポジウムなどの形で——例えば「労働者協同組合の発展の可能性」というようなテーマを深めてみる。これは、単に研究者の関心を満たすというだけでなく、実践的な立場からしても、非常に意味のあることではないかと思えます。

そういうことをうまくかみあわせていくと、集会前後の取り組みも含めて、北海道的な特徴が出ていけるのかな、と思いました。

〔中田〕 来年は、北海道で労働者協同組合連合会の全国総会を開きます。また、全国協同集会を、11月をめどに名古屋で開くために、現地に要請に伺いました。これらを北海道の労働者協同組合の飛躍の契機にしてほしいと思います。そもそも人口からいけば、労働者協同組合の事業の10%は北海道で占めなければいけないんですね。

〔大友〕 ここはカットだな（笑い）。

〔菅野〕 最後は専務の訓示で締めですね（笑い）

〔司会〕 本日はどうもありがとうございました。

（文責・菅野正純）

